

記者の視点

毎回、業界紙誌の皆様からのいろいろな視点でご寄稿いただいております。
今回は『2017年の年頭に考える』油脂特報 記者 蟻川宏様からご寄稿を頂きました。

2017年の年頭に考える

有限会社油脂特報社

記者 蟻川 宏

新年あけましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨年末、日本植物油協会が恒例の製油業界10大ニュースを発表した。1位が「米国大豆3年連続で豊作1億トン超え、世界生産も史上最高予想」だったのは、すでにご承知のことと思う。一方で、貴市場開催のやはり年末の恒例行事「大納会」で、乾杯の音頭をとった全国油脂販売業者連合会の宇田川公喜会長は、その挨拶の中で「今年（2016年）は、製油メーカーが一度も値上げを発表しなかった。この業界に入って私も20年ほど経つが、これは初めてのことでないか」とのお話があった。さかのぼって調べてみたが、2004年に製油メーカーが再編統合し、正式に日清オイリオグループ、J-オイルミルズの2大メーカーが誕生して以来、2015年までは毎年、何回か値上げの発表があった。従って、少なくとも合併後のこの12年間で、値上げ発表がなかったのは2016年だけということである。

と思いきや、昨年末12月26日、まさにこの原稿を提出したその日に、J-オイルミルズが来年2月からの値上げを発表した。

コスト環境はこの1~2カ月で激変した。昨年11月以降、急速な円安に見舞われており、原料も高止まりしている。年末の値上げ発表は、毎年値上げ発表があったが、極めて異例で、おそらくこの12年で初めてのことだと思う。メーカー側の強烈な危機感の表れと推察する。

今年は値上げの1年となる。適正なマージンを確保できるかどうか、正念場となる。できなければ元の木阿弥、相変わらず進歩の見られない業界ということになる。

話しは全く変わるが、もう一つ、思うところを。消費の低迷や節約志向の継続など、その多くは否定的に語られるものだが、今の日本にとってそれは、もはや普通のことで、それを無理やり逆転させようとすることに自体に無理があるのではないか。

棚ボタの円安で、株価が上昇。景気は足踏み状態から今年は改善に向かうという見方が出ているが、じゃあ、それまでの政策は何だったんだ。常々消費拡大も経済成長も、少子高齢化で成熟社会となった日本においては、もはや考えが時代遅れなのではないかと思っている。成長をすべて否定しようとは思わないが、量的な拡大あるいは過度な利益の追求が粉飾決算や過重労働、過労死につながると考える。バブルの恩恵を受けなかったので、当時への郷愁は全くない。景気回復というが、一体どこまで回復すれば満足するのか。バブルに踊ることなのか、物価が上がり、土地の値段が上がり、物が多く売れることを景気回復と言い、日本はそれを目指しているのだろうか。現状を肯定する方向へ、考え方を変えてみれば、豊かさ、幸せの基準も変わるかもしれない。景気回復に囚われた考えを解放してみてもいい。

新年早々、とりとめもなく、すみません。今年1年が、製油業界にとって、そして日本、世界にとっても良い年となることを心から祈念いたします。